

38 肝細胞癌に対する内視鏡的経鼻胆管ドレナージを用いた胆管冷却下ラジオ波焼灼療法

倉岡 直亮*・鱒 陽介・長島 藍子
須田 剛士・山本 幹・塩路 和彦
五十嵐正人・青柳 豊

新潟大学医歯学総合研究科
消化器内科学分野
新潟大学医歯学総合病院
臨床研修センター*

【緒言】肝細胞癌（以下 HCC）に対する局所療法としてラジオ波焼灼療法（以下 RFA）の有効性が報告されているが、胆管近くの病変では焼灼による胆管損傷や狭窄の報告がなされている。今回、当院で行われた RFA について胆管損傷のリスクについて検討した。高リスクと思われる症例に対して冷却下 RFA を施行したので、経験を報告する。

【対象】2010年～2011年の間に当院で RFA が施行された 40 例を対象とした。

腫瘍径、占拠部位、焼灼回数、RFA 前の TACE の有無に関して CT, NRI 上術後胆管拡張を認めた群と認めなかった群間に差異があったかどうかを評価した。

【成績】画像上胆管拡張がみられた症例は 40 例中 14 例（35%）であった。

腫瘍径については胆管拡張例、非拡張例の中央値はそれぞれ 20mm, 19mm であり、Mann-Whitney-U test にて $P = 0.2670$ であり有意差を認めなかった。

焼灼回数についても胆管拡張例、非拡張例にて中央値はそれぞれ 2 回、2 回であり、同様に Mann-Whitney-U 検定にて $P = 0.7948$ であり有意差を認めなかった。

RFA 前に TACE が行われた症例 ($P = 0.012$)、肝門部近接病変 ($P < 0.0001$) についてはカイ 2 乗検定とともに有意差を認めた。

【方法】冷却の方法として 5%ブドウ糖液 500ml を 2 つ輸液ポンプに接続し、500ml/hr × 2 の速度で氷水で冷却しながら灌流させた。

【症例】ハイリスク症例 2 例に対して ENBD を用いた冷却下 RFA を施行した。

case 1 は 75 歳男性、背景肝は LC (C) であった。S6 13mm 多血性 HCC に対して EL-TACE 施行し、同部位に冷却下 RFA を行った。術後胆管拡張は認めなかった。

case 2 は 78 歳男性、背景肝は CH (C) であった。case 1 と同様に冷却下 RFA を施行した。術後胆管拡張は認めなかった。

【結語】HCC に対する RFA に伴い、35%の症例に術後胆管拡張が認められた。

術前 TACE の有無と腫瘍の局在が、術後胆管拡張のリスク因子と考えられた。

内視鏡的経鼻胆管ドレナージを用いた冷却は、ラジオ波焼灼療法に伴う胆管障害の軽減に寄与する可能性が示唆された。

39 全生存期間からみた TACE と chemolipiodolization の比較検討

兼藤 努・吉川 成一・上村 顕也
田村 康・高村 昌昭・五十嵐正人
川合 弘一・山際 訓・須田 剛士
野本 実・青柳 豊・松田 康伸*
和栗 暢生**

新潟大学医歯学総合研究科
消化器内科学分野
新潟大学医学部
保健学科・検査技術科学専攻*
新潟市民病院消化器内科**

【目的】切除不能肝細胞癌に対する治療として、TACE と TOCE のいずれかが全生存期間をより有意に延長させるか否かを比較検討した。

【方法】当院と新潟市民病院において 1983 年から 2012 年の間に切除不能肝細胞癌と診断され、TACE, TOCE, HAIC を初期治療として施行された 426 人の予後を無治療群 46 人とともに比較検討した。

【結果】治療を受けたいずれの群でも無治療群に対して全生存期間の延長が認められた。TACE を施行された群 (TACE 群) と TOCE を施行された群 (TOCE 群) の間には背景因子として、年齢、性別、Child-Pugh、ICG K 値、腫瘍 stage に